田中大秀『竹取翁物語解』開板への階梯

山崎正伸

国文学研究資料館の一九八一年度目録によると、高山市郷土館には、以下の竹取物語関係書籍が所蔵されている。

物語21	（外）	竹取翁物語解	（内） 竹取翁物語解	文政十三年刊	六冊三五〇コマ
物語22	（外）	竹とり物語	（内） 竹とり物語	正保三年板本	二冊　六八コマ
物語23	（外）	竹取物語解追考		写	一冊　五七コマ
物語24	（外）	竹取翁物語解	（内） 竹取翁物語解	写	六冊三三〇コマ
物語25	（外）	竹取物語解	（内） 竹取翁物語解	写	一冊一一〇コマ
物語26	（外）	竹採物語	（内） 竹とりの翁の物語	写	一冊　五三コマ
物語27	（外）	竹とりの翁の物語	（扉） 竹採物語校訂	写	一冊　六三コマ
物語28	（外）	竹取物語解	（内） 竹取翁物語解	写	一冊一一四コマ
物語29	（外）	竹取物語解　中書	（内） 竹取翁物語解	写	一冊　三八コマ

物語30　（外）　竹取翁物語解目録　（内）　竹取翁物語解目録　写　一冊　一四コマ
物語31　（外）　竹取翁歌解　（内）　竹取翁歌解　写　一冊　二一コマ
物語32　（外）　竹取物語解　副巻　写　一冊　五九コマ
物語33　（外）　竹取物語抄大秀補註　天明四刊　二冊一五四コマ
物語36　（外）　竹取物語抄　天明四刊　二冊一三七コマ
物語65　（外）　竹取翁物語解　（内）　竹取翁物語解　刊　一冊　三〇コマ

（注　一部表記は改めた）

もとより、田中大秀の竹取物語研究といえば、『竹取翁物語解』ということになるが、この解及び解に関わる一群の竹取物語とは別に、全丁に亘って大秀の注がびっしりと書き込まれている竹取物語（物語22）がある。これは、正保三年板本の本文にかなり手を加え、上部空白箇所を中心に空白という空白や付箋までして語句の注釈を書き込んだものである。一・二丁分を適当な区切れまで示すと、

①いまはむかし竹とりのおきなといふもの有けり野山にましりてたけをとりつゝよろつ②の事につかひけり名をはさかきのみやつことなんいひける其竹の中にもとひかる竹〔なん〕一すち③ありけりあやしかりてよりて見るにつゝ④の中ひかりたりそれを見れは三すんはかりなる人いとうつくしうてゐたりおきな云やうわれ朝こと夕ことに見るたけの中にはするにてしりぬ子⑤になり給ふへき人なめりとて手にうち⑥入て家へもち⑦〔て〕きぬめ⑧の女にあつ⑨（一丁表）

△頭注▽①只むかしといふ詞なるのみ　②まじるは野山へ行かよふをいふ　③世をわたるいとなみにせし也　④あやしきは恒のありさまにあらぬ事をいふを本にてこゝはいぶかしがる意不審に思ふ也　⑤見えすきたる也　⑥しりぬはしりぬといふ也　⑦竹取翁が子に成り給ふべき因縁としりたりと也　⑧なめりなるらんなりといふ程の詞にて察したる意ある詞也　⑨うちは発

語にて常にいふうちすてうちわすれなといふうちと同じくこゝはたゝ手に入れてといふ事也　⑩持来りぬるなり　⑪竹取翁が妻女をさす也　⑫あつけては妻の女に引受させて也　○なんはぞといふ詞に似てやすめ詞也　○とりつゝは取てといふに同じ

けてやしなはすうつくしき事かきりなしいとおさなけれははこにいれてやしなふ竹とりのおきな〔竹とるに〕此子を見つけてのち取にふしをへたてゝよことにこかねある竹をみつくる事かさなりぬかくておきなやう〳〵ゆたかになりゆく此ちこやしなふほとにすく〳〵とおほきになりまさり〈る〉三月はかりになる程によきほとなる人になりぬれはかみあけ〔なと〕さうそくなとせ〈さうしてかみあけ〉させきちやうの内よりも出さすいつきかしつきやしなふ程に此ちこのかたちのけそうなる事世になく屋の内は（一丁裏）

△頭注▽①やしなはすはやしなはしむといふ詞にて即そだてさす也　②ちいさき也　③此子を我が子にして後はといふ事也　④ふしは時節の節にて竹の縁語也ふしをへたてゝといふは一日おき二日おきに金ある竹を見つけし也

△付箋▽ふしは竹のふしにてあらんかさあらてはよ毎の義聞えかたきやうに覚ゆ　⑤よは竹のふしとふしとの間をいひごとには一つくりかへしに也　⑥たびかさなりぬる也　⑦さてといふにおなじ　⑧やう〳〵は次第〳〵に也　⑨ちごは乳のみ児いふを本にてこゝは童女をさす　⑩すこやかなる也無事無難なる意也　⑪十五六歳に成たるへし　⑫別に記す　⑬いつくはよきが上にもよかれ〳〵と大事にかけてそたつる也　⑭うつくしやかなる也　⑮世にたぐひなき也

くらきところ〔も〕なくひかりみちたりおきなこゝちあ〔しくくる〕しき時も此子をみれはくるしき事もやみ〔ぬ〕はらだゝしき事もなくなくさみけりおきなたけをとる事ひさしくなりいきほひまうのものに成〈さかへ〉にけり此子いとおほきに成ぬれは名をみむろといんへのあきたをよひてつけさすあきたなよ竹のかくやひめとつけつ〈侍る〉

△頭注▽①月の光の如く明らかに家の内のてりたる也　②なぐさむは翁か心のなぐさむ也此子を見んは病気もなほりはらだちもやみて心なぎたる也　③ひさしくなりは年をへて也　④いきほいまうのものに成たるとはいよいよ富貴繁昌の家となりたる義也

（注）正保三年板本を白塗して消した所を〔　〕で示した。○○△△▽は、正保三年板本に白塗した上で、大秀が校訂した

箇所を○○と示し、もとの正保三年板本を〈△△〉と示した。大秀が正保三年板本に加えた箇所を○○○◎○○と、◎をもって示した。

とあって、以下の本文にも恣意的な改変が見られる。この本文改変には、他本を以ての校合などはされていない。また、注も語句の意味に関わるものばかりである。該本の購入時期や大秀が注記した年月は不明であるが、本文に対する態度や注の内容から推して、かなり早い段階の物と推測される。やはり、大秀の竹取物語注釈の始発は、天明四年（一七八四）刊行の小山儀の注解に入江昌喜の頭注を加えた『竹取物語抄』に、大秀が補注を加えた『竹取物語抄大秀補註』（物語33・以下『大秀補註』と記す）であろう。ここには入江昌喜の序文の後に、大秀の補注の序が書き加えられている。これには、

小山儀わかくてよくもかくまてくはしくは引書たるされとなほ其詞の説におきてはをさなき事おほかり又入江昌善か頭書も少しはまされりとみゆれと猶なつめることきこともましれりおのれ先つとし此物語のうつし巻をえつそは家々に蔵（ヲサメ）たる古き写本（ウツシマキ）ともをくさ〳〵つとへてわきにつけたりにていと〳〵よろしかくて此抄にそのよしとおもふをかいそへ文章の脱（ナチ）たらんとおもふ事おもひよれる詞の例注のあやまれりとみゆるなとおもふまゝに書そへてみむとてはつかに書付なめしはたさて打やりおきしをこその初秋越中富山左脇大彦君物し給ひて物語のついてに見せまゐらせけれはこれとく物せよなおこたりそいそきをへたらんにはとくみせてよなとの給ひ契り給へれは又さらにおもひおこしてかくはかきそへつるなん猶とし月ふるまゝにおもひよれる事もあらはかいそへてむかし

田中大秀

文化九月正月

と、大秀の竹取物語研究の経緯が記されている。これによると、「此物語のうつし巻をえつそは家々に蔵たる古き写本ともをくさ〳〵つとへてわきにつけたりにていと〳〵よろし」という写本を入手し、それをもって『竹取物語抄』に書き込みをしたというのである。その竹取物語が、『竹取物語』（物語26）、現在高山本と称される大秀所持源常言書写本である。

該本の奥付には、

此古写本に後の校合本は朱は普通板本一写本　春樹校正　墨は活板本　抄本　同異本　校合本　古写本

右の朱書は安永二年武村美伎といふ人の普通板本又一古写本も心して校合せしもの也

亦墨書は城戸千楯ぬしか所持本をもて校合せし物也その本は林鮒主の蔵本の古写本上田百樹か所蔵の安永中に平信之校合本また抄本抄のイ本等也

寛政十二年夏四月九日　佐野春樹記之

寛政十二年夏四月三日夜燈下一閲校畢

古　林氏所蔵古写本　校　上田氏所蔵校合本

抄　抄　抄イ　同し

今　普通　又板本ヒ

右以藤原秀雅大人所蔵之本謄写畢

享和二年夏四月十三日正五位下主計助源朝臣常言（花押）

とあって、この校合本が、大秀の本文校訂に与えた影響は大きく、この奥書の後に、朱筆で大秀の注記が付されている。ここには、

文化七年正月成身院良賢法印と寛文三稔印本を以読合之こと〳〵く朱を以書入印の字を付正月廿日再読合畢

湯津木香木園主田中大秀（花押）

と、文化三年（一八〇六）に大秀の門人となった良賢法印と、既に所持していた寛文三年板本をもって校合したことが記されている。この寛文三年板本は現在確認はしていない。本文は、前記した正保三年板本と同じであるが、この正保三年

板本は前記した如く、所々に白塗によって手を加えてしまっており、校合には使用できなかったものと推量される。さて、この高山本であるが、佐野春樹の区別する朱墨の別はない。現在の朱は、寛文三年板本との校合と「印」の印に、校異本文の可否と句読、そして少ないが大秀の注釈が朱書きされている。この良賢法印との共同作業が後の本文校訂に大きな意味を持つものと思われる。『大秀補註』の序にあるように、大秀は抄を底本として、これに高山本を以て本文校訂を行った。『大秀補註』には、巻末付載の摂陽書林柳原積王圃蔵板和書目録の終り余白に、大秀の朱筆で「庚午春花箋堂」と書かれ、大秀存命中の庚午年は文化七年（一八一〇）のみで、この年の春、即ち、正月の良賢法印との寛文三年板本校合後間近に該本を購入し、早い段階でこの書き込みが行われたものと推定される。花箋堂は『改訂増補近世書林板元総覧』によると、京都の銭屋利兵衛のことで、この前後からの関係から、後述する最初の「解」である『竹採物語校訂』（物語27）と『竹取物語解』（物語25・以下『解』25と表記する）の二冊を出版する発売元の一書肆となったものであろう。『大秀補註』には、『解』25で、

竹とりの翁のものかたりは諸の物語のいてきはしめの祖としもいひて殊にふるくめてたきを（古ことなと引いて〻注さくなとは）□さとしふみつくれる人もなくて年経にけるを契冲阿闍梨の河社（□あさりの随筆也）に天笠もろこしの書ともかつ〳〵引出られけるを始にてくたり〳〵をわけて注さくしたるは天明の比小山儀（難波人）□か抄のみなん有けるそも〳〵此物語よたゝ一わたりふかき心もいれでよみ見むにはいとやすくわかれて聞ゆるやうなるを言の義なとくはしく心得んとていくたひもかへさひ読あらはへむとすれは中々にいかにそや覚ゆるくま〳〵おほく出来てまとはしうのみなん成ゆくめるさるは此書もとより詞をいたくはふきたるに脱たる○誤（事）れる○はた世（所）々をふるまゝに数そはりたれはなりけりかく先つとし小山か抄におのれいさゝかおもひよれる事ともかつ〳〵書くはへたりしを去年の初秋越中富山左脇大彦とふらひ来てそれなほくはしうして見せてよなとそゝのかすにことし。江戸人巨勢健冬はた印本の世にことなる一巻をもて来てそれよみかむかへかたみに言のこゝろ

論つらひなとしつるにをち〳〵わきまへえたるを猶世にひろくほ(つたへも)ところして此物語このみ(よみ見ん)らん人にしめさまほしくてなん　文化九年十二月

〈頭注〉「大平云詞ヲハブキタルニハアラス古文ノ自然也」

と大秀の注釈と健冬所持の古活字本との異同とを加えたとあるが、現在の『大秀補註』には健冬の解釈他多くの注解が加わっている。またここには、随所に、抄の竹取物語本文への校訂が見られる。ちなみに、先に挙げた正保板本（物語22）と同一箇所を、抄の注を除いて挙げると、

〈枠外〉　竹とりの翁(フナシ(朱))の物語(写本にかくあり　槇丸本ニナシ(朱)　ふ可諸本普真写)

いまはむかしたけとりの翁といへるもの有けり野山にましりて竹をとりつゝよろつ(可)のことに(イ写ナシ)つかひけり名をはさるき(さかき写榊古　ママ可)

のみやつこ(○丸)となんいひけるその竹の中にもとひかる竹なん一すち有けり(イナシ可ナリ)あやしかりてよりて(写る非)見るにつゝ(と交非)の中ひかり(と交非)

たりそれを見れは三寸許なる人いとうつくしうてゐたり(写の活)

〈頭注〉さるきは讃岐公佐伯直宿祢ナト云姓氏録ニミユコレラノ誤ナリ佐々貴山公みやつこ丸ト下ニ見ユコヽモまろ脱タル歟　ましりて古今春下いさけふは春の山へにましりなん暮なはなけの花の陰かは　後撰春雨のふらは野山にましりなん梅の花笠有といふなり　竹なん一すち有ける　竹一すち有けり右いつれにてもよろし本行のまゝにてはてにをはとゝのはず　三寸許なる人今昔物語にも三寸許なる人とあり写本活本のとあるはよからす

おきな云やうわれ朝こと夕ことにみる竹の中におはするにてしりぬ子になり給ふへき人なン(朱)めりとて手にうち入て(校ナシ非)

家へもちてきぬめの女にあづけてやしなはすうつくしきことかぎりなしいとをさなければ箱に入てやしなふ(イこ可)

〈頭注〉家にトアル方マサレリ下ニもちて来ぬトアレハナリ家へトイヘハもちてゆくトアルヘキナリにの方マサレリ　《以下朱書》

槇[磨]広呂云上ニ竹ヲトリテ万ノヿニツカフトアルナレハ篭ノ方マサレリ　大秀云おうなとあるかた可然又篭といはんより箱といふ方

につかはしき也竹をとるにといふことかさなりて聞くるし一ッハ可削サレト故ヨリ有ナルヘシ
たけとりの翁竹とる(をイ 可（朱）)に此子(写事非（朱）)をみつけてのちに竹とるにふしをへだてゝよことにこがねある竹をみつくる事かさなりぬ
かくて翁やう(古ナシ非)／＼ゆたかになりゆく此ちごやしなふほどにすく／＼とおほきになりまさる三月はかりになるほとによ
きほどなる人になりぬれは髪あげなどそう(さイ)○てかみあげ(そく校（朱）)○させ(イせ（朱）)○きちやう(イナシ イもきす（朱）)のうちよりも出さず
△頭注▽もきす後拾遺賀人の裳着侍けるによめる清原元輔(させもきすちやうの真)住吉のうらの玉もを結上てなきさの杢(［松］)の陰をこそみめ抄に云童女の裳着
は男の元服のことし始て髪そき裳きる事也　もきすは裳着すなりあるかたまされり（朱）　すく／＼大秀云註頭書（筆者注…小山
儀注・入江昌喜頭注）モニ非ナリすく／＼ハ進ノ甚シキ意ナリ今スク／＼トノヒルナト云ト同シ詞也　宇治拾遺三廿七雀ヲ飼取ニ側
よりもする／＼と生たちていみしう大に成たりコノスル／＼モ同シ意ナリ　古事記傳卅二ノ卅八丁さゝ波路を須久々々とわがいま
せはや」俗言にずか／＼とト云下にて滞らす速に行さま也とてこゝを引てコノスク／＼ハ速に成長するさま也と云レき狭衣に火の
光みゆる方へすく／＼とおはすれととあり　源語桐壺にすか／＼ともえ参給はぬ也けりコノすか／＼も同意也
△頭注▽ちことはいまた乳をのむほとの子をいふなれとこゝはさにはあらすこゝ抄にといふほとのことゝ心得へし
いつきかしづき(真写ニナシ)やしなふほどに此ちごのかたちけそうなる事世になくやのうちはくらきところなくひかりみちたり

とあり、語句の注釈も正保板本（物語22）に付されたものに比べ、飛躍的に進歩している。「たけとりの翁といへるもの有けり」の「いへるもの」については、苦慮したようで、『竹採物語』（物語26）にも、

竹とり(古本ナシ)の翁の物語(普ナシ（朱）)真題ナシ（朱）
いまはむかし竹とりのおきなと(印普真（朱）)いふ(いへる抄 可（朱）)ものありけり

と校異が記されるが、以下には真（健冬所持本）も普（普通板本）も無いが、「いへる抄」に付けられた朱の「可」は、その下に朱で「非」とあって、迷いがあったことが窺われる。この『大秀補註』には正保板本（物語22）書き入れに見られた

強引な改変は少なく、『竹採物語』（物語26）の良賢法印との寛文三年板本との対校作業や、健冬所持の古活字本との校合作業を基礎に、明確な注釈と、根拠となる用例を上げての校訂となっている。この校異については、『大秀補註』の補註の序の終りに次のような本文校異に関わる貼り紙がある。ここには、

真槇麻呂蔵本一冊上巻下巻ノ境ナシ四十一紙片面十一行内題ナシ囲ナシ普通本ヨリハ大キナリ書モ古風ト見ユ奥書年号書肆ノ名ナシ越中高岡鈴彦ノ蔵ヲ請得タリトソ此本ト写本トヨリ合せり末ニテハタカヒタルこと多シ別本ナリ

普普通本二冊ニワカチテ上巻片面十一行囲アリ内題アリ上ハたけとり物語トシテ上ノ字ナシ末ニ――――上終トアリ下ハ――――下トアリ末ニハ題ナシ加賀金沢富田権佐蔵本ハ奥ニ茨城多左衛門板トアリ後ニ切入タル名ナリ大秀カモタルハ同板ニテ奥ニ寛文三稔癸卯仲秋吉辰尾平兵衛開板トアリ是モ切入タルナリ抄本ト大概同シケレどもまたタカヒタルことモアリ

写寫本ハ京都御園主計助常言ノ蔵タリケル本ナリ寛政十二年四月古写本ニ佐野春樹ト云人城戸千楯カ本林鮒主カ古写本上田百樹カ校本普通本此抄本等マテ書入シ本ナリ

於是文化九年壬申八月四日ヨリ始メテ江戸人槇麻呂巨勢朝臣維昔ト右三本ヲ校合シ脱文脱字ヲ考解ノ諸説ヲ上ケテ十三日ニ到テ読終　　香木園田中大秀（花押）

とあって、文化九年（一八一二）八月四日から一三日にかけて行った健冬所持の古活字本との校合と知られる。この健冬所持本は、『竹取物語抄』（物語36）に浄書されたような形で「冬」として槇麻呂所持本との六二箇所の校異が記されている。これを、新井信之氏の『竹取物語の研究　本文編』[1]古活字版十行本と比較すると、

No.	冬（抄の本文に対して）	古活字十行甲本
1	なりぬいきほひ猛のものに成にけり	写活冬　成ぬいきほひまうのものに成にけり

2 つけつ　写冬　つけつ
3 やみの夜にいてゝも穴をくしりかいまみ　写冬　やみの夜に出てもあなをくちりかひまみ
4 ひとりは中納言いその上のもろたり　冬写　中納言いそのかみのもろたり
5 よひいてゝ　冬写　よひ出て
6 のたまへと　冬写　の給へと
7 したかはすなんあると　すくす　冬写　したかはすなんある　すくす
8 わか子の　冬写　我子の
9 こゝら大きさ　冬写非　こゝらおほきさ
10 女は男に逢ことをす　冬写印アリ　女は男にあふことをす
11 出来て　冬印　出きて
12 しらす　冬写　しらす
13 としき　冬　としき
14 いはんかたなく　冬印　いはん方なく
15 むくつけゝなる　冬印　むくつけけなる
16 のゝ　冬ナシ　ナシ
17 あるときには　冬　ある時には
18 辰のとき　冬写　たつの時
19 いはく　冬　いはく

20	花の木	冬印	華の木
21	出たり	冬	出たる
22	きのふなん都に	冬	昨日なむ都に
23	たち	冬　ナシ	……まうて
24	とのたまふ	冬	との給
25	出来たり	冬	出きたり
26	たまはらん	冬　ナシ	たまはん
27	給はる	冬	たまはる
28	かの唐にをる	冬	彼唐にをる
29	（ふみ）を	冬	文を
30	もちて	冬	もちて
31	むかしの世にも	冬写	昔の世にも
32	とそ有ける	冬	とそありける
33	のたまひて	冬	の給ひて
34	とりいてゝそへて	冬	より出てそへて
35	色々に〈物語33「にイ」〉	冬	色々
36	間毎に〈物語33まごと　に真〉	冬	誠
37	めはみす	冬	め見す

38	楫取のいはく	冬	かちとりのいはく
39	ぬるを	冬	ぬるを
40	玉を	冬	玉を
41	玉やとりて	冬	玉や取て
42	もろたり・は	冬・改	まろたかの
43	とはせ給ふ	冬	問せ給ふ
44	返事を	冬	返事を
45	かの司の	冬	彼つかさの
46	二十人の人の	冬	廿人の人の
47	あらこに〈物語33　真こノ誤ナリ〉	冬	あらたに
48	給はんなん	冬	給はんなん
49	まことに	冬	誠
50	冬のナシ〈物語33　真ナシ可〉		（ある人）の
51	翁につけていはく	冬	翁につけていはく
52	いたりて	冬	至りて
53	を・は	冬　ナシ	……をみて
54	おやをはしめて	冬	親をはしめて
55	翁こは	冬	翁こは

56　姫のいはく　　冬　　姫のいはく
57　ありとも　　冬　　ありとも
58　人来は　　冬　　人こは
59　まからんするも　　冬　　まからんするも
60　子のとき　　冬　　ねの時
61　なりにたり　　冬活　　成にたり
62　ぬきおくきぬに　　冬　　ぬきをくきぬに

となり、新井氏や田中剛直氏の『竹取物語の研究』[2]によると、冬健所持本は古活字十一行甲本と考えられる。『大秀補註』には、より多くの異同が記されている。この『大秀補註』は、大秀が本文に高山本による校異を付し、補注を付けた形で出版するつもりであったことは、抄の原表紙を変え、原題簽に「大秀補註」と書き加え、「竹取物語抄大秀補註」とするのみならず、扉には、次の下段の如き書き込みによって窺われる。

竹取物語抄

原　本

大阪　小山儀　釋
同　入江昌善頭註
飛騨　田中大秀補註
竹取物語抄
越中　弘中重義　再評
江門　巨勢維昔

書き込み

そして、序文には前掲の如く『大秀補註』の出版を目指した経緯が書き加えられており、『竹取物語抄』に加筆しての出版を考えたのであろうと推測される。しかしながら、『大秀補註』は開板には至らなかった。この『大秀補註』には、多くの書き込みと、幾枚かの記録年月日を記した貼り紙が見られる。その一つに、上の三十丁裏三一丁表には、

○古國（五穀イ）をたちて　大秀按ニ抄ニ古国ハ此国也トイヘリ此国ヲこくにトハ云へき言ニアラズ此国ノ意ニトラハの字脱タリトスヘシ此国ヲ立テハ御子ニ従ヒテ蓬萊ニ至リシヿヲ云歟ト聞ユレモサニアラズ偽言ニ五百日ト云ニ蓬萊ニ至リテ四百余日ニ帰着スト云大ヤウカナヘドコヽハ其偽ヲアラハスヿヲ云処ナレハ不レ合（ズカナハ）マタ一本ニ五穀をたちてトイヘルモコヽニヨシナシ是ハ仮字ニこゝくト有シ故ニ古国（コ、ク字音）トモ五穀トモ誤レルナリ必誤字脱字アルヘシ故按ニこゝろをくだきてナリろヲくニアヤマリをノ下ノくヲ脱シ支（ノ方キ）ヲ知（チ）ニ誤レルナリ呂（ロ）ト久（ク）支（キ）ト知（チ）字体ヨク似リ

○これをたまひて　大秀云たまひてト云ハ物ヲ授ル人ノ方ニ付テ云詞ナリサレハこゝハ給ひてば給ひてよたまひなはたまへナト有ヘキ処ナリ給はりぬるト云ハ受ル人ニ付テ云詞ナリサレハ給はりてト云ヘシ賜りてト云方甚マサレリ俗ニ云はこれを申給てト云意（後ニ又按ニたびてナルヘシたびてハタマハリテノ約タル言）又たびては両通ノ詞也タマヒテノツメモナル也二月七日再按）

○わろきけこに　按ニわかちて家子にノ誤ナリちトろト似タリ知ト支上ニ云ルカ如ク互ニ誤レリ支ノ下ニてヲ脱セルナリ

○けこハ家子ト心得レハ安クワカルヽ也伊勢物語（井筒の段）ニ手つからいひかり（ママ・ひ）とりてけこのうつはものに盛けるをみてトイヘルけこモ同シ万葉にいさ子とも又いさやこらナト小児女ノ事ならて已ニ従ヘル家人ヲ云ナリ家ノ子ノ古言ナルヘシ已カ里ノ語ニ家内ノ人ヲ数フルニ彼カ家ハ何人けご誰カ内ハいくたりけこナト云ナリ又延テけいごトモ云今ハ其家ノ主従モ数フルニ云モモトハ家ノ子ノヿニテ此けこト同シ家ハ字音子ハ訓ナレハ別ニ義アルカ按ニ家ヲやかやけト云

ヘハ家持ヲやかもち三宅ヲみやけ　やかこノやヲ畧キ加ヲ轉シテけこト云フカやけハいね（稲）こゑ（声）なへ（苗）ナト云如ク居タル詞やかハいなたねこわつくるなはしろナト下ヘツゝク時ウツレル詞ナリサレト此物語モたかとりト云ヘキヲたけとりトイヘハ即やけ子の畧歟依テコゝハわかちて家子モニトラセント云事ナルヘシ抄ニけこハ飯櫃ナリ録（ママ）ヲ玉ヒテ飼子ノ料ニセントナルヘシト云ヘルハツキナシ伊勢物語モ闕疑抄に家子トイヘルヨクキコユ古意ニ箇子飼子ノ意ニトル寸（トキ）ハ又下ニうつはものト云ヒテハ重タルヤウニ聞エテ聞ヨカラヌコゝチス家子トスル寸（トキ）ハ子ゝモ勢語モサマタケナ解ヤスシ

文化八年辛未十一月廿九日　　大秀考

此所皆同意ナリ　維重

とあって、文化八年（一八一一）の秋以降、抄への補注を完全なものにするべく注釈作業を継続していたことが窺われる。また、大秀自身も序文に記した文化九年（一八一二）正月以降も抄への補注の仕事を続けていたことが知られ、加えて、「此所皆同意ナリ　維重」と弘中重義によって付加されているが、「維重」は、維昔すなわち巨勢健冬と弘中重義とを指し、両者が同意したということで、『大秀補註』の再検討が大秀・重義・健冬の三人によってなされていたことが知られる。この時期を明確にすることはできないが、健冬は文化九年（一八一二）に大秀に入門し、また同書の上十八丁裏の貼り紙に、

惟昔考（ママ）　重義同意　文化九年申七月六日巳刻

ひかりのうするかと此うするいかゝうつるかツトスト違ひか失（うスル）るニテハモトヒカリノアル鉢ニテアレハ可叶白山に逢テヒカリノウツルト云ナルヘシ

とあり、序文末の本文校異の貼り紙の「文化九年壬申八月四日ヨリ始メテ江戸人槇麻呂巨勢朝臣維昔ト右三本ヲ校合シ脱

文脱字ヲ考解ノ諸説ヲ上ケテ十三日ニ到テ読終」というのからも、文化九年（一八一二）正月に大秀の手によって補注が一応完成したものの、さらなる完成を目指して抄への補注作業は続けられていた。こうして、本文や注釈の研究を続け、質量ともに抄との差異が大きくなるとともに、抄の補注ということでは飽き足らなくなったのではなかろうか。

文化七年（一八一〇）正月の成身院の良賢との寛文三年板本との第一次の校合に続いて、文化九年（一八一二）八月四日から一三日の健冬との第二次の校合を行い、それをまとめたものが、『竹とりの翁の物語　田中大秀訂正』（物語27）と、高山本の内題を外題にしたものであろう。これには、現在は扉としてあるが、原表紙であったかと思われる厚手の用紙中央に大きく『竹採物語校訂』（以下この名称による）とある。この奥付は、「文化九年八月飛驒田中大秀校訂」となっている。これと対にして考えられるものが、『解』25で、外題として「竹取物語解　田中大秀註」とあり、『竹採物語校訂』の扉と同紙に内題として「竹取物語解」とある。序文には「文化九年十二月」とあり、本文には「竹取物語解巻上　飛驒　田中大秀著」とあり「著」は「解」を白塗訂正して上書きしたものである。上巻末にあたる五二丁裏に「文化九年壬申年十一月　意富（花押）」とあり、八二丁裏には「十二月九日書　於保（花押）」とあって、文化九年（一八一二）十二月に完成した最初の大秀の「竹取物語校訂本文」と「竹取物語解」であろう。この『解』25には、この写しと考えられる『竹取物語解』（物語28・以下『解』28と表記する）がある。これには序文がなく本文だけであるが、『解』25を本居大平に送るにあたって、大秀自身が手元に置くために用意したものであろうか。両者には目移りからと思われる一部の前後する所はあるものの、丁付から字配りまで同様である。この『解』25と『解』28の先後関係は、『解』25の一部の訂正が『解』28では修正済みの形となっていること、『解』25の一三丁裏の鈴木朖の書き入れと同箇所の『解』28には「朖云此説愚意不問ノ事ステニイヘリ」とあって、『解』25が先行するということは明白であろう。ただ、この『解』28の巻末には、大秀の字

で、

湯津香木園蔵板

製本弘所　京都　銭屋利兵衛
江戸　須原屋茂兵衛
大坂　奈良屋長兵衛
飛驒　鍵屋與六

香木園著述書目録

帝記正訓　コノ書ハ師ノ神代正語ノ後ヲ継タルニテ即古事記書紀古語拾遺霊異記等ノ古書ヨリ皇代ノコヲ古言ヲ以テ正語ヨリモ委クセル書ナリ　訓あらためひらかなもて

竹取物語解　末明ノ比小山儀カ著セル抄アリ
多本ヲ合テ校訂ノ本文一冊ニ解二冊コト〳〵ク本文ノ丁数ニ引合委シク注釈セリ　後に此物語に似つきたる古事ともを附録トセリ

住吉物語　コノ書ハ住吉物語ノ本書なるへし古本飛驒国ニアリシヲ誤脱字多キヲ普通印本ヲ以テ校訂シタル本ナリ旧本ハ哥数三十四首アルヲ此本ハ六十四首アリ海内一本ナレハ飛驒本ト称ス

多賀城碑考　壺碑ト多賀城碑ト別ナルコヲ弁シ碑文ヲ悉ク古書ヲ引テ注ス

養老美泉録　佐加由久春　三法の玉　眞赭之芒　四まくらの月　神楽哥解　まさきつゝら

一桂葉集　催馬楽哥解　二桂園文集　飛驒史傳　飛驒雑記　細江集

とある。

そして、これを追いかけるように『竹取物語追考』（物語23・以下『追考』と表記する）の添削を本居大平と鈴木朖に依頼した。『追考』の成立は不明であるが、二九丁裏に「文化十一年三月尽再考終」とあることから、この年月に近い頃であろう。表紙裏に「御序文御製作奉希候此追考御添削被下候はゝ京都柳馬場三条上所飛驒屋多助方へ御出し可下候」とあって、序文製作と添削を依頼し、済み次第京都柳馬場三条上所飛驒屋多助に渡されるよう願い出ている。この『追考』の中には『解』25の本文第一丁が囲みと「竹取物語解」という柱をもつ次の版下見本の一葉が収められている。

此格好よろし玉のおくし玉勝間ナド格好よしすへて鈴屋著述ノ板行ぶりにしたかふへし（赤・大平）

このかこひ今少し廣き方よろしき歟（墨・大秀）

竹取物語解巻上　　飛驒　田中大秀著

初葉　今ハむかし　すへて物語といふものハ過にしことおくれてまねふ事なれハ此ものかたりを始にて世々の物語ふみ今の世のさとひ物語にいたりてもむかし〳〵とかたりいつるなんふるきならひける○たけとりの翁といふもの有けり抄いへる伊勢物語にむかし紀ノ有常といふ人有けり大和物語に右馬允藤原千兼といふ人の妻に俊子といふ人なん有ける　ひえの山に念覺といふ法師のなとあり皆

○竹取物語解上　　○一

このような状況から、大平の許から『竹採物語校訂』と『解』25が返却されたら出版する予定であったことが窺われる。しかしながら、大平から返却された『竹採物語校訂』の扉の裏には、

注解ノ語ハイカヤウトモ書ヘシ雅ニアラセンヨリハ正シク俗ニチカク書ムヘシ給ふ申御ナトゝかくへし（赤色）

給ふ候ふナトハ正シク給ふ候ふトカク歟たまふさふらふトカク歟に定ムヘシ〈候〉〈給〉ナトハアマリ畧過タリ御ヲ〈御〉トカカケトモ〈御〉ナトゝカケルヿナケレハ〈御〉〈給〉ナトモカクマシキ也鈴屋文集ニモ〈給〉ふトカゝレタレヒイカゝ也〈給〉ふト云字ハ或人ハ玉ふノ畧也トイヘリ大平ふるき世ノカケルモノニ〈給〉ふトカケルヲ見タリ伝テたまト書例ニたまふノ畧ナラント思ヘリ或ハ給ふヨリ給ふトカキ給ふトカクヿカト云人アレド猶たまふノ片ナラント思ヘリコレハイマタ定メテハ云カタキヿナレハマヅ慥ニ給ふトカクゾヨキ（黄色）

申すトカクガヨカルヘシ外ニカキヤウナシ〈申〉ハアマリ畧也（赤色）

申ト云字モ畧過タリサレト申トカゝンモアマリ正シ過タリヨク考フヘシまうしたまふナトゝカゝンハ難ナカルヘシフルキカキブリヲヨク見考フヘシ（黄色）

物語ふみナトハコトヤウナルカキサマハ甚ワロキヿ也

スヘテ歌モ文モ古雅ニシテヨミヤスク書ヘシオチクホノ板本ノカナケシカラズコトヤウニテ見ルニワロシ此竹取ナトハ甚正シキヨキ物語ナレハカキブリモヨク正シク書ヘキ也抄本ノカキヤウモ今少シ雅テワロシ菅笠日記ノカキヤウモ今少シ過タリ古雅ニシテ正シク書ヘシ俗ニナラヌヤウヲ第一ニ思フヘシ〈御御申侍候ふ給ふ奉〉ナトスキブン正シク雅ニカクヘシ　（注…〈〉の中は、崩字）

と、大平の注が書き込まれ、『解』25の扉にも、

本文ノ平假字ニてニ天トカゝレタルハワロキヿ也てト書ハヨシ天トカクハワロシ〇かなノ文字ニアマリ字ノ大小ノナキヤウニ書ヘシカナハ人ノ物イフヤウナ物也字クハリモ心得アルヘキヿ也ハシメノ所ハアマリ大小モ見エネヒ後ニハ

大ニ大小アリ（以下黄色）

今ハむかし竹とりの翁といふもの有けり野山にまじりて竹をとりつゝ萬のことに（以上赤色）ナトヤウニ書へしソノウチ竹翁野山萬ナトハ少シク大ニ書へしイツレ鈴屋集ノ古今遠鏡ナトノ書サマヲ見合スヘシ也と云字ハ片假字ノ内ニハ書クモヨシ平假字ノ内ニハなりト書ソヨキ縣居大人鈴屋大人モ平かなの内へ也トカゝレタレモ大平ハシカセズ

とあり、本文にも、

よりところ

此物語は天ちく唐に書ともを集とりてつくれりすへての分のさまをみるに佛書によりたる物にて凡彼經ともの序正流通といふことをおもひてつくりなせるやうにみゆかくや姫の人となれるまて序分なり五人の人々に得かたきものみんといへるより帝の恋せさせ給ふまて正宗分とみへし天にのほれる處流通分也はしめは寶樓閣経により得かたきを得んといへるは詩経史記月宮殿のことは起世経竜城録なとをおもへる也けり

〈頭注〉朖云全部四段ニワカツベシイトカシコウ遊ツイテ一段五人ノ人々ノ事かひありとはいひけるマテ一段帝ノ御心はせ玉ふ一段天にのほる一段也物語據ノ事ハ師ノ玉小櫛ニ論シ置レタリコゝニモサイハマホシ此一條ノ御説朖ハ味キナク覚エ侍リ

ふみの名　〈大秀〉〈清書予三考〉

落窪物語源氏物語なとむねとしていふ人の名もて付たれは是も蓬生の巻に見えたることくかくや姫の物語とこそ名津くへけれと絵合の巻に竹とりの翁としもいへれはやくより翁のかたを名にはおひけんかし河社に竹とりの名は万葉集十六の巻なる竹取翁によれりといへりさも有へし〈六百番歌合に〉頭昭〈法師〉多迦とりとよめるを判者難せられたり大和物語なる哥をたかとりとかける本も有をとりて契冲はかよはしてもくるしからぬにやといへり猶抄の頭書にもあけつらへりふるく多気とりとよひ来たりたれは今はたけとりとよむをとれり

＜頭注＞腹云書名としるすへき歟

つくれる時世　繪合十二オ

我師鈴屋大人の源氏物語のちうさく＜書き込み＞

玉の小櫛にたかいつよにつくれりとはさたかにしられねともいたくふるきものともみえす延喜よりはこなたのものとそ見えたると師はいはれきされと源氏に巨勢相覧か画に詞は紀貫之かけりのかけるよしみゆれは延喜のさきより有しものなるへしつくり物語なれはかゝはるへき事にはあらさめれと紫式部のいたく心しらひしつる物なれはつれ〳〵草にいへる小野道風かかける朗詠集野たくひにはあらてふるくよりもてあそひて時代も似つかはしけれは相覧。貫之。なとのものせるとはいへるなるへし○彼經、高野大師の将来れりといへは大同の比よりは後なるへしまた此物語に富士の烟いまたたえぬよしなれは古今序にふしの烟も今はたゝすなりにけれはとあれは是も延喜よりふるき證とすへけれと彼烟後にもあるはたち或はたえ○しつる事あれは證ともしかたし竹取物語は　物語　彼物語は作主

校合異本

寫本といへるは佐野春樹といふ人寛政十二に校合したる本なり橋本稲彦より御薗常言かうつし傳へたる本それに校合したる本ともは林鮒主か所蔵の古写本上田百樹か所蔵の安永中平信之と校合の本活字本小山か抄本普通印本ホ板［等］を合たるよし奥に記せりかれ今も

○写本としるせるは彼写本の本行なり

＜頭注大平＞こは橋本稲彦の傳へたる本なりトシテワリ書ノ注ニセズト引ツゝけて本文トスヘシ

○古本とは写本の脇傍に古としるせるにて林鮒主氏か本也

○古本とは校本の畧也写本の脇傍に校としるせるにて上田百樹氏か本也

○活本とは写本の脇(傍)に活としるせるにて活板の本也

普通印(板)本と抄本と大かた同しけれは抄(本を)とのみしるす印(せり板)本に異なる事あるときのみ

○印(普板本)　とはしるしつ

△頭注大平▽脇ト云フ傍トカヽン方普通ナルヤウニ覚ユ脇トイヘル例モアル歟考フヘシ

○交も畧字ニセズト正シク何ハカリノタガヒモミエズ板にゐれるナトモイヒスリマキナトモ云テ既ニ板本ト云名目鈴屋ノ著書ニイハレタレハタヽニ板本ト云ゾ通例ナルヘキ

健冬所蔵の古印本(板)一冊○四十一紙半面十一行囲なし普通印本(板)よりは大なり書体古風あり奥書時年板主名なし此本と写本と大かた同し末にては異ことあり写本と同しきは此本を

○冬(古板本)　としるして写本をあけす○類(群書類従第なり)

内題は抄本健冬か本のなきにより写本にははしめに竹とりの翁の物語と有(普板)　印本にはたけとり物語と有竹とりのとはいはてはよからす故標題は写本によりつ

△頭注大平▽冬トシルス丁少シイカヽナレモ外ニ思ヒアタリナシ古板トシルサンモ古ト云一本アレハソレトマカハシカラン

凡例

今校訂せる本多くは抄(まつ多本に)にしたかひて異本(つれと)の異本のよきは改めつ改めつ又おのかみしかき心(方まされるはとりて)もて補もはふきもあらため(けおろかなる△大平▽)もしつるはいと〳〵かしこく罪得ましきわさなれと思よれるはえすてやらてなんすへて補もし畧もし改もしつるは本にしるしをつけて此解にこと〳〵くことわれりされは返さはとく本の侭にかへしつへし(い　か　に)

△頭注大平▽短心ナト云ハ短才ナト云ヨリ云フナルヘケレモコヽハ何トナクおろかなる心ト云ソヨキナニトナリヒゲニナル也かし

こくモアマリ也罪得なましモコヽニハ不叶コレモワサトヒケシテ云詞ナレハおふけなきわさト云ソヨキ

○異本によりて改つる補つるは脇(傍)に○点をくはふ

○私に改つる補つるは脇(傍)に●点をくはへ(ふ)て甫としるせるは補字の畧にておきのふしるし也支としるせるは改字の畧にてあらためたるしるし也

△頭注大平▽補モ改モ畧字ニハセズト正シク書タランモワツラハシクモアラシ

○諸本にありて(衍とみえて必可削ところは)今の本に畧たるは此解に出して(引)□如此囲をかく

○詞かさなりて聞くるしく衍とみゆる物から猶えけつらぬは左に〃点をくはふ

○誤字とみゆれと猶えあらためすてかくもあらんとおもふ(や)は脇(傍)に片假名を付て訓をのみあらさむ(ほゆる)(た)

○脱字脱文と見えておきなひかたきは行中に(脱乎)としるす　抄本と他本といつれよけんとおもふはいさゝかもまさりたらんとおもふ方を本に出して解にのみ他本をあく諸本々つなく誤れりとみゆるはことわらぬも有へし

○すへて字形の似たる或は音かよひなとして書写の誤れる例ともこと〳〵く師の玉の小櫛の四の巻の末に出せり此物語も彼小櫛をとりてときわくへし

○河社また抄また同頭書なとに引たる書とも用あるはみなとりつ河社に云抄に云なと記せり出書ちかきはしるさす抄の頭書は小山儀(入江昌善といふ人の書加へたる也)か

△頭注大秀▽○注釈の例證に引たるうつほ物語栄花物語源氏物語なと巻の名あるは源氏の栄花のなとはしるさす直に吹上巻あかし巻なとしるすへし是らは巻の名とも人もよくしてまかはてなり

○抄の説ひか事多しすへてあけつらはす此解の説を引合て考さとるへし

△貼り紙大秀▽○いふいはくの類再考

○師といふは本居宣長大人なりおのれ此解かく書あらはして今本居大平翁にみせ
文化九年十二月

と、序から、「よりところ」「ふみの名」「つくれる時世」「校合異本」「凡例」のそれぞれにも細かな注書きがほどこされている。そして、解の本文にも、随所に大平と朖の注が付けられており、そのままの出版は断念せざるを得なかったのだろう。

『解』25の序文奥付の後の空白に、改めて、

此ちうさくよいにし九年のしはす一わたり書をへつるを本居翁の許に紀伊国につかはしてみせまゐらせて彼翁のおもひよられつることをも書加へなとして何くれと事しけくて漸に十二年の夏より板にゑらすへく清書しつ

と、文化十二（一八一五）年夏に再び解の出版を志したことが知られる。それ以前に、『竹取物語校訂』には、

同一十年六月江戸巨勢健冬書

とあって、これによって、文化十年（一八一三）六月に健冬の書によっての『竹取物語校訂』の版下を企てたことと、それがなんらかの理由で、中止されたことが知られる。その理由の一つは、大平と朖の大量の添削に答えなければならず、それなりの時間を要したこと、もう一つは健冬の早世によるものであろう。健冬の没年は、高山市郷土館の和部66「詠草」、表紙に「詠草　飛驒　田中大秀」とある書籍の十八丁表に「槇葉集跋案　大秀」があり、十九丁表から「槇葉集の跋」と題した以下の一文がある。これを翻刻すると、

緑蔭巨勢健冬またの名は槇麿みつから江戸人とのみいひてつはらかには家をも名をもあらはさてある人のしひてとひけれはむさしのにおふるうけらのうけき身のもとのねさしをたれかしるへきとてなん有ける歌は新古今集のふりをまなひ書は芳宜園の翁にならへりとそいふひとり霞の関を立いてゝそこはかとなくみやひたる人をとふらひつゝ處々に

とゝまりては歌のこゝろをときそとし筆の道ををしへ導ひきなとこゝらの國々ゆきめくりけるにおのれいにし壬申のとし加賀國にものしけるとき越中國富山里にてはしめてあひて秋のころは必と契おきけるに七月の末つかたとふらひ来にけれはわか桂のもとに遊へる人々にもいさなはしめ又竹取物語の注釈書あらはすをりにて其文よみあはさせなとせしをこそのきさらきいまた都も見す紀伊国本居大人をとふらはん須广[磨]あかしなと名たゝる海邊も行てみん夏は又かへり来て又こゝもとにて伊勢物語のちうさく書あらはしてんなといひ契りて大秀かしれるみやひをたちの許には文そへて出たゝせけるに川上雄亨主のもとに津のくに武庫の里に久しくとゝまりて夏の末つかた福はらの津にうつりその冬は淡路国にもわたりて有けるかこの春又福はらの津にかへり来て十日はかりわつらひて三月三日といふにはひは卅あまり二つにてなんむなしくなりぬると聞こそかなしけれうちはへたる病は有けれと今しはしたになからへたらましかは哥も手もいやまさりて人にもちひらるゝ人ともなりぬへかりしものをとおもへはいと〳〵あたらしなんかくて此一巻はありしよに［頭注…二巻ニテモ三巻ニテ〈ママ・モ欠〉巻ノ数ニ書改ムヘシ］よめる歌作れる文のみつからかきあつめたる冊子の有けるを見いてゝ川上主そのころえりいてのへついて給ひて板にはえらせ給つるになん名におふ緑の蔭かはるへからす槇のはのちりうせぬ千年の後のかたみとなし給へる此主のふかきめくみをしら露のはかなくきこえしその玉も嬉しと思はさらめやよろこはしと思はさゝらめやかくいふは文化の十とせあまり一とせといふ年の長月飛驒のくに高山人田中大秀

と、健冬没時は文化十一年（一八一四）三月三日と知られる。健冬は文化十二年（一八一五）夏の解清書時には既に没しており、そのため当初本文は健冬の書でと予定していたものが中止となったのであろう。それがこの墨の抹消線によるミセケチではなかろうか。余談だが、健冬の早世は本文版下の作成ばかりでなく、『追考』の十丁裏に、

○そはつら[□古]　冬抄さはひら健冬申ニハカクラクノ初瀬ノ山ノソハヘラヲコ、ニ一句ワスレタリ　マキシクレナキト云哥六帖ニ

有シヤウニ覚ユト云タルニヨリテ六帖ヲ見レモトミニ不見出候コレニヨレハソハヘラソヘハつノ誤ニテそはツラナメレハ古本つらトアルニヨルヘク存候ソハツラト云證アラハ書入可被下奉希候

とあり、『大秀補註』の上の二九丁表の上部余白には「槇丸云六帖」とあって、健冬存命ならば古今六帖から探し得たものであろう。勿論、大平は、上部余白に、

第五帖　かくらくのとませの山をすそへらととよすめ神のまきしくれなゐ　スソトイヘハ裾ヒラノ意カ　山のかたはらヲそはト云　山のそはみち　そはつたひナト云ヿ古キ歌ニ多アリ柴人のかよふそは道ナト云歌モアリシヤウ也コトく今闇記セス古歌ヲ夫木六帖其外西行俊頼ナトノ歌ニアルヘシ

と答えている。

こうして、本文校訂はそのままに、解の改訂作業は、文化十二年（一八一五）夏に開始されたものの、その清書された解は不明であるが、『竹採物語校訂』と、『解』25と『解』28と『追考』の「解」からなるものとで出版を目指したことは、『解』25の序文と、『解』28の奥付と、香木園著述書目録によって知られよう。「製本弘所」とある「飛驒　鍵屋與六」からは後に『養老美泉辨』を出す。京都の「銭屋利兵衛」のことは、本居宣長の「享和元年辛酉　入京日記」[3]によると、

○三月廿八日夜明けたち出　晴天　坂下にやとる
○廿九日朝雨天　上山迄ふる　後ハ曇　草津にやとる
○晦日　曇ウス晴　石山ニ詣　八ツ過頃　蹴上ケニ著　城戸千楯　銭屋利兵衛　出迎

とあって、大秀は享和元年（一八〇一）の四月十三日に鈴屋に入門しており、宣長の許で知ったものかと想像される。須原屋については、元田脩氏[4]によると、文化五年（一八〇八）に祖父飛驒郡代長谷川庄五郎忠崇の飛州志十二冊のうち四冊を須原屋左助に写させていること、文化七年（一八一〇）所蔵の住に吉物語の古写本に印本を以て校訂して出版を勧めて

いることが知られる。このような関係から須原屋一統の総本家の須原屋茂兵衛を選んだものであろう。大坂の奈良屋長兵衛は、大坂本町の書肆葛城氏で、『竹採物語校訂』の奥付に「文政二年二月大坂書肆葛城氏にて一写本を買得て三月十三日一校畢」とあり、大野政雄氏[5]の年表によると、この時別に落窪物語注釈一巻と曽根好忠集を購入し、文政四年（一八二一）にはこの葛城長兵衛の依頼を受けて落窪物語解を著述し始めている。又、「香木園著述書目録」には、文化十一年（一八一四）の成立とされる「養老美泉録」や「神楽哥解まさきつら」を始めとして、それ以前の作品が並べられている。ここに「養老美泉録」が挙げられているが、文化十二年（一八一五）の「養老美泉辨」が挙げられていないことから、文化十一年（一八一四）に、本文一冊と解上下二冊の三冊での開板を目指していたことが、表紙裏に「文化十三年十一月九日始」と記す『竹取物語解中書』（物語29・以下『中書』と表記する）によって知られる。この最初の部分を翻刻すると、

竹取翁物語解　　飛驒高山　　田中大秀　撰

第一葉　今はむかし　すへて物語といふものは過にしことをおくれてまねふことなれは此物語を始て世々の物語ふみ今世のさとひ物語にいたりてもむかし〳〵と語あるなんふるきならひなりける○竹とりの翁といふもの有けり抄にいへるとあれと伊勢物語にむかし紀有常といふ人有けり大和物語に右馬允藤はらの千兼といふ人の妻に俊子といふ人なん有けるなとあり皆此てうなれはといふものと諸本にあるをとりつ○野山にまじりて新撰万葉に駒なへてめも春の野に交南わかなつみくる人もありやと古今にいさけふは春の山邊にまりしなん云々猶後撰源氏物語なと哥にも物語にも多き詞なり椎本上巻名

（集春下）（春下）（そせい）（山野に入るをいへり）（なみいたすへし）（の語多く引るみ）

なとにも有

これと比較するため『解』25の同一部分を翻刻すると、

とあって、

竹取翁物語解巻上

飛驒　田中大秀　著〈白塗補修上字「著」下字「解」〉

初葉　今はむかし　すへて物語といふものは過にしことをおくれてまねふことなれは此ものかたりをはしめにて世々の物語ふみ今世のさとひ物語にいたりてもむかし〳〵とかたり出るなんふるきならひ也ける

たけとりの翁といふもの有けり　抄（三）いへる伊勢物語（トアレト）にむかし紀ノ有常といふ人有けり　大和物語に右馬允藤原千兼といふ人の妻に俊子（諸本に）といふ人なん有ける　ひえの山に念覺といふ法師のなとあり皆このてうなれはといふものとあるをとりつ

野山にましりて　古今春下（そせい法し）いさけふは春の山邊にましりなんくれなはなけの花の陰かは後撰春上に（題しらす よみ人も）春雨のふらは野山にましりなん梅の花かさ有といふなり

とある。ここで□をもって記した（ママ）三・トアレト・諸本には、後からの書き込みである。この『解』25の上部余白には、

契沖川社にいはく竹取の名は万葉集十六に昔有老翁号曰竹取翁也と有によれる歟といへりさも有へし／忠こそ廿三ウ

山はやしにましるものは／椎本／沙石集

とあり、『解』25と同一の『解』28の上部余白には、

六帖春の題新万　駒なへてめもはるのゝにましりなんわかなつみつる人も有やと／椎本（ク朱）廿八（オ）（此後撰ヲ本哥也引に不及朱）いまはましての山にましり侍らんもいかなる木の本をかはたのむへく侍らん／沙石集一ノ十五昔三井寺山門ノ為ニ焼ハラハレテ云々寺僧モ山野ニマシハリ人モナキ寺ニ成ニケリ／忠こそ廿三ウ忠こそ法しに成給はんとする処身をくたきて山林にましり給人なんうら山しく覚ゆる云々山林にましるものは云々

とある。『解』25・『解』28に引かれた古今集と後撰集は、上文に翻刻したように既に『大秀補註』の上部余白に朱筆で書

かれており、『大秀補註』（物語33）→『解』（物語25・物語28）→『中書』（物語29）という展開は明らかである。しかしながら、『中書』の作業は『竹採物語校訂』の七葉までの本文に対する「解」の部分の『解』25・『解』28を書き直したものと推定される。以下こうした作品として残っているものは、『竹取翁物語解』（物語24・以下『解』24と表記する）の六冊本のみである。しかし、文化十三・四年（一八一六・一八一七）頃にも竹取物語解に関わっていたと推定される痕跡がある。それは、『大秀補註』の本文六丁裏に、

家の人どもにものをたにいはんとていひかくれどもことゝもせず（ひ欺（大秀））

〈頭注書き込み〉家人ナトノ前ニテハかくや姫ヲ見テモ逢ㄱナラネハもしや人音モセヌ所ニ居タラハフト姫ノ来タランヤニアカラサマニタニ逢也トカクレ居テモシルシナシト云意ナリ

〈上部余白書き込み〉ことゝもせす大秀云カクテモキコユレヒ若クハことどひもせす云々物云ハズと云ㄱカ　千足云ことゝはこたへの誤ナルベシ

とあることでの推測だが、吉田千足は、元田脩三氏によると、文化十三年（一八一六）に、「尾州名古屋藩士吉田専七郎千足入門寄宿、翌年十二月十五日退去す。（名簿、門人録）」とあって、大野正雄氏の「荏野門人録」[6]によると文化十三年七月十四日の入門でであって、この時から翌年十二月十五日までの寄宿中に「解」の改訂作業に関わったものと推測される。そのあたりの注を『解』25と『解』28に見ると、

ことどひもせず（補）　事ともせすにても聞えたれと家人の返答せぬ事なれは物もいはすという意なるへしことゝはぬものいはぬといふ古言なり　古事記に本牟智和気御子ものゝたまはぬことを然是御子八拳鬚至于心前真事登波受万葉にことゝはぬ木すらことゝひのともしきこら

〈『解』25上部余白赤色字〉ことゝひ補　非也

〈『解』28上部余白〉朖云此二条共ニ非ナルヘシ

〈『解』25上部余白大秀墨〉千足云こたへもせすとありしを誤れるなるへしといへるいとよし

とあって、『大秀補註』や『解』25に書き込みを続けていたことが知られる。千足の足跡は『大秀補註』にしか確認されず、『竹採物語校訂』・『解』25・『解』28・『追考』の披見が許されなかったのか、後述するが、足立稲直には、『解』25の二二丁表の鈴木朖の考察に対して「印云此御説奉感」とあるような書き入れを始めとして、三十箇所に亘って注記があるが、これに比べて不思議な気がする。

『解』24には、作業に関わる年月日が分かるだけでも、

文政九年霜月廿六日（首巻二丁表）

以上乙酉三月朔長瀬俊香ト校了（一巻一四丁裏上部余白）〈乙酉三月は文政八年（一八二五）三月のこと〉

文政七年甲申十月十六日以上四十三葉畢荏野翁（一巻四一丁裏）

佛鉢の段七葉　十一月十八日註畢（二巻七丁表）

玉の枝のくたり　解三十九張文政八年乙酉正月七日注畢大秀（二巻四六丁裏）

文政八乙酉年三月廿七日於荏野書畢り火鼠の裘の段十四葉　田中大秀稿（三巻一六丁裏）

丙戌　従九月廿五日至十月十日　竜の玉廿七葉　稿成　大秀（三巻四三丁表〈裏表紙表〉）〈丙戌は文政九年〉

丙戌　従十月十一日至廿一日　十三日より十五日まて休鵜の子安貝　十九葉　稿成（花押）（四巻一九丁裏）

丙戌　十月廿五日廿九日十一月一日二日三日四日　霜月四日解畢　御狩りの行幸　廿一帋[紙]　大秀（四巻四十丁表）

十一月九日始　（五巻一丁表）　十二日　（五巻一一丁表）

十六日　（五巻一七丁表）　十七日　（五巻一九丁表）
十八日暁七ッ始　（五巻二三丁裏）　十八日夜　（五巻二六丁裏）
十九日　（五巻二九丁表）　廿日　（五巻三二丁表）
廿一日　廿二日　（五巻三七丁表）

文政九年丙戌十一月廿三日解畢　天の羽衣　四十二葉　田中大秀　（五巻四二丁表）

と、多くの注記がある。これによると、大秀の書で文政七年（一八二四）十月に一巻が、文政八年（一八二五）正月に二巻、三月に三巻の火鼠の裘の段、文政九年（一八二六）九月に三巻の竜の玉の段が、十月には四巻の燕の子安貝の段が、十一月四日には巻四の御狩りの行幸の段が、十一月二三日には五巻が出来上がって、文政九年（一八二六）十一月二六日には自序をものしている。長瀬俊香の校正は一箇所しか知られないが、五ヶ月遅れで巻一の三分の一が行われている。こうして、出版される『竹取翁物語解』の原稿が出来上がった。『解』24の本文冒頭は、

竹取翁物語解

赫映姫おいたち　飛騨高山　田中大秀著

今ハむかし竹取おきなといふもの有けり野山にましりてたけとりつゝ萬の事につかひけり名をはさぬきのみや つこまろとなむいひける

○今ハむかし」すへて物語と云ものハ過にしことをおくれてまねぶなれハ此物語を始て世々の物語今の世のさとひ物語にいたりてもむかし〳〵と語いつるなんふるきならひなりける

＜上部余白書き込み＞むかしとは遠くもあれ近くもあれ過去し前を云言なり日本紀に往歳古語拾遺に久代なと書

又常に畴昔の字を用たり字書に字畴は曩也左傳註ニ畴昔猶前日也昔は左傳疏拠レ今而称ニ上世謂之昔者也と見えたる今はむかしと云万葉廿二轉り行時みることに心いたく牟可之の人しおもほゆるかもとよめり

○竹とりの翁といふもの」伊勢物語にむかし紀有常といふ人有けり大和物語に右馬允藤原千兼といふ人の妻に俊子といふ人なん有けるなとあり抄本にのみいへるとあるはわろし（る例によるへし）○野山にましりて新撰万葉（古今集六帖にも）駒なへてめもはるの野に交南わかなつみくる人もありやと猶分古今（春下）後撰（春上）源氏物語（椎本）巻沙石集（一巻）のなと」（以上分本イに）にも多く例ある詞なり（ことく）○萬の事に」（抄本は不挙）類従本ハ抄本トニしたかひつ宇治拾遺物語（六加茂社に行て米を得たるところに）此米をよろつにつかふにたゝ同し多さにてとあれは万にといふこと諸本になきもよかるへし

〈上部余白書き込み〉（哥ハカリ可引得撰春上）是竹の在所にて其竹とるとて間の節に入交りてある也

とあって、文政十三年に出版された解とは異なる。そして、高山市郷土館蔵『竹取翁物語解』（物語65）には、竹取物語本文と解とを合わせた文政十三年版の形態の版下見本が綴じられている。なるべくその形に忠実に翻刻すると、

竹取翁物語解巻第一

飛騨高山　田中大秀著

かくや姫おひたち

今はむかし竹取翁といふもの有けり野山にましりて
たけをとりつゝ萬のことにつかひけり名をはさぬきの
みやつこまろとなむいひける

○今はむかし凡て物語と云物ハ過去し支をおくれてまねぶもの
なれは此物語を始て世々の物語ぶみ今　世の俚び物語に至ても昔
昔と談出るなむ古き効なりけるむかしとは遠くもあれ近くもあ

○竹取翁物語解巻一　一

れ過去し前を云言なり。安閑紀に往歳。古語拾遺に久代など書。常に
疇字書に疇糞也左傳註疇昔猶前日也糞尓雅疏在今而道既往昔字左傳ノ疏ニ拠レ今而称ニ上世ヲ謂之昔者一也を用たり
葉万巻廿にうつりゆく時みる毎に心いたく牟何之の人し思ほゆ
るかもとあり○竹取ノ翁」ハ竹を採て物造を世業とすれば世ノ人竹取ノ
翁と呼つる由なり○といふ者ありけり

一ノ巻[最]末初四葉未刻

とあって、『解』24の書き込みが本文化されているものの、文政十三年（一八三〇）の板本ともまた異なる。大秀の序文も、文字遣いは別にして八箇所ほどの変更がされており、本文にも多くの変更を見る。大平の文政十一年（一八二八）十一月一日の序文も『竹取物語解副巻』（物語32・以下『副巻』と表記する）に「藤垣内翁序文草稿」として草稿原稿が四編と大平の訂正の手紙が一通貼られており、完成までには時間を要したものと思われる。この『副巻』には、香木園原稿用紙

に庚寅春日の奥付を有する朖の訓点付きの跋文「鈴木朖翁跋文訓点」も収められている。もとより大秀書とある大秀の版下原稿は整版時になくなるが、『解』24と文政十三年板本との隔絶は、本文と解とを一緒にした『解』24が板本の解の草稿であって、想像ではあるが、版下原稿の元となった「解」原稿の存在も思われてならない。

こうして『大秀補註』から十五年をかけ開板にまで漕ぎ着けたもので、校正にも細心の注意を払っていたことが『竹取物語解』（物語65）によって知られる。ここには、二八葉の誤りのある解の本文印刷と、前述した本文冒頭の版下見本一葉が収められている。簡単に表示すると、

1　一巻十二（表白紙裏のみ印刷）
2　三巻十一
3　一巻廿七
4　一巻八
5　一巻廿三
6　一巻五
7　一巻六
8　一巻廿五
9　一巻廿六
10　一巻廿七
11　一巻廿八
12　一巻三十四
13　一巻四十五
14　一巻四十六
15　一巻四十七
16　一巻四十八
17　一巻三十三
18　一巻三十五
19　一巻三十六
20　一巻冒頭版下見本〈47・48頁に翻刻〉
21　三巻廿二
22　三巻廿三
23　三巻廿四
24　一巻十七
25　一巻十八
26　一巻十九
27　一巻三十七
28　一巻三十八
29　一巻三十九

がある。このうち一・二を例示すると一巻廿七丁裏には「り〇物もくはずは末▨に天皇姫」とあり、文政十三年板本では▨の箇所天の羽衣の段とされ、一巻三十三にがは、上部余白に、

以下〇印四枚刻人相止メル事
猟（クワウ）（イヌ）

とあって、横を猟に彫り誤ったことと、彫りを残しを指摘している。このような校正を経て解の出版は、

文政十三年
庚寅春發兌
尾張桐園蔵板
尾州名古屋本町十丁目
製本所　松屋善兵衛

尾張桐園蔵板
江戸下谷池之端　須原屋伊八
天保二年　京堀川通高辻上ル　植村藤右衛門
辛卯　初夏
發兌　大坂心斎橋北久太郎町　河内屋喜兵衛印
同　唐物町　河内屋太助
尾州名古屋本町十丁目　松屋善兵衛印

と奥付されるように、文政十三年（一八三〇）春名古屋の松屋善兵衛の元から発兌された。そして、翌年の天保二年（一八三一）初夏には、松屋善兵衛を中心に、須原屋伊八、河内屋喜兵衛、植村藤右衛門、河内屋太助と、江戸・大阪・京都

まで販売している。なお、国文学研究資料館の初雁文庫には、「尾州名古屋本町十丁目　松屋善兵衛」の部分が「尾州名古屋本町十一丁目　萬屋東平」とある『竹取翁物語解』が所蔵されている。この板は摩滅や匡郭の切除が見られ、「松屋善兵衛」板の後刷りと思われる。

こうして出版された解だが、高山市郷土館所蔵の『竹取翁物語解』（物語21）の文政十三年版には、首巻廿丁表の上部余白に、

常陸風土記に香嶋郡童子女松原古有年少僮子　注俗云加味乃乎止古加味乃乎止賣男称那須寒田之郎子女号海上安是之嬢女並形容端正光華郷里相聞名声同存望念自愛心滅経月累日嬥歌之会俗云宇太我岐又云加我毘也邂逅相遇于時郎子曰伊夜是留之阿是乃古麻部に由布悉弖丶和乎布利弥由母阿是古志麻波母嬢子報歌曰　宇志乎尓波多丶牟止伊閉止奈西乃古何夜蘇志麻加久理和乎祢佐婆志理之便欲相晤恐人知之避自遊場蔭松下携手低膝陳懐吐憤既釈故恋之積疹

と常陸風土記を引き、巻一の廿八丁五行・六行の間に貼り紙をして

四ノ十四丁右同廿五丁右同五十四丁右五ノ十六丁右可考合

とする。また、巻五の十六裏・十七表の間に十六表の「御使つかはせ給ふは」に加えたものと思われる貼り紙に、

雄畧天皇葛木一言主神に物獻ラス処に云々以拝獻（ヲコロカミテタマツリキ）と古事記傳に（四十二ノ十二右）獻ハ百官より獻ルにはあらす天皇の獻給ふ由なり然るを獻給とは不レ訓は古語のなり凡て古語には奉といふに賜ふを連ねて云る事なし必賜ふと云へきにもたゝ奉ると云る例なり

とあるものや、巻五の四十丁裏の上部余白に、

大鏡五丁五　義孝少将賀縁阿者利の夢に見えし処に阿者利君はなと心ちよけにておはする母上は君をこそ兄君よりは忌しう恋聞え給ふめれと聞えけれは甚あたはぬさまのけしきにて哥云々とあり是も遺言に母上に我死はへりぬともとかく

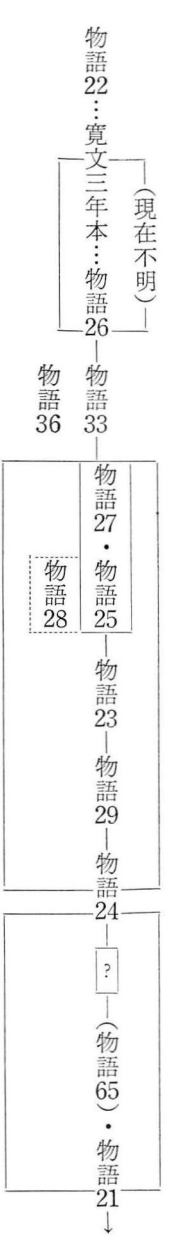
例のやうにはせさせ給ふなと云置れしを母上悲みに物も覚ずて例の如くせさせられけれは蘇生されぬ事を恨られたる意なるへし

とあって、次の改訂に向けての作業を続けている。

別の機会に触れることとするが、「此物語よたゝ一わたりふかき心もいれでよみ見むにはいとやすくわかれて聞ゆるやうなるを言の義なとくはしく心得んとていくたひもかへさひ読あらはへむとすれは中々にいかにそや覚ゆるくま〳〵おほく出来てまとはしうのみなん成ゆくめる」という所から板本の解完成まで、高山本との出逢いとこの高山本と寛文三年板本とを校合した門人良賢法印、古活字十一行甲本とを校合した門人巨勢健冬、『大秀補註』の共同作業を行った健冬と富山藩侍講の弘中重義らとともに、『竹採物語校訂』と『解』25ができた。これに本居大平・鈴木朖の懇切丁寧な添削論及と秦鼎の補足考証があって、大きく発展した。この大平・朖・鼎との遣り取りとは別に、『解』25・『竹採物語校訂』・『解』28に合計三十箇所ほどの「印云」と書き込みがある。これは、『解』25の五九丁表の貼り紙に

からうして　此詞をやう〳〵ト説玉フコト乍恐印納ガ心ニハマキラハシキヿト存候ヤウ〳〵ノ約リタルニテ語意大ニ遠ヘリアナカシコ印云

とあって、印納すなわち足立稲直と知られる。健冬が兵庫に出かけてからはこの印納と作業したものか、稲直・吉田千足と経て、板本の『解』の形にまとめ直した門人山崎弘泰・長瀬俊香と、倦むことを知らない大秀の長年の研究によって『竹取物語解』が完成した。これまで述べて来た板本の解の成立までを図示するならば、



黎明講読期　本文研究期　出版発端期　出版計画期①　出版計画期②　出版計画期③　出版完成期

とでも並べることが可能か。とても大部の資料ゆえ、まだまだ読み終えないものも多いが、中間報告としてまとめるものである。なお、注記ではないが、『解』28の二六丁表の貼り紙に、

国に

飛驒之たか山元日を迎えて　旅まくら出て見ればくらゐ山かすみたなひく春は来けり

とあって、大秀の歌か、他に三冊本の『竹取物語解』を読んだ者の歌か、詠者を明かにしていない。或は、この者の注までもが紛れていることもあるのやもしれない。

参考のために、これまでに作成されている田中大秀の年表によって『竹取翁物語解』の略年表を付載する。参考にしたものは以下の年譜である。

○印　元田脩三『田中大秀年譜』大正十三年十月

△印　中谷一海「田中大秀年譜」『国語国文の研究』昭和三年・九、十一、十二

□印　大野政頭「田中大秀年譜」大野政雄『田中大秀』松室會編・昭和二九・六

◇印　中田武司「田中大秀の竹取物語研究」『竹取物語』高山市郷土館蔵解説・笠間書院・昭和五七・四

なお、☆印は補

寛政十一年　一七九九　己未23○五月十八日、加藤歩蕭（高山の俳人、伴跋塙の門人）の紹介状を携へて伴蒿蹊を訪ふ。
□――――、落凹物語の言釈について蒿蹊に質す。
寛政十二年　一八〇〇　庚申24○九月八日、加藤歩蕭の紹介を以て伴蒿蹊の門に入る（歩蕭宛蒿蹊書簡）
享和　元年　一八〇一　辛酉25□四月――、伊勢参宮を機とし本居大平を訪ふ。折から宣長上京中のため大平の紹介状を得て京に上り、四月十三日宣長に入門、その講筵に列した。
享和　二年　一八〇二　壬戌26　九月二十九日本居宣長歿七十二歳。
文化　元年　一八〇四　甲子28□八月九日、出発、十五日松阪に着す十月十三日まで約二ヶ月の間、本居大平の許で宣長の遺書を謄写し国学を研究した。
□八月二十日、九月二十三日の両度山室山の師の墓に詣で、二十五日宣長の霊祭には「道寿詞」を影前に奉った。
□十月三十日帰着。
文化　四年　一八〇七　丁卯31△長久寺良賢入門す。（門人録）
○四月中旬、舟津町大森豹同伴、始めて越中にものして、万葉の遺跡をとぶらひ、国府なる大伴家持の館址を遊覧す。＜中略＞弘中氏（重義）の文会に列す。（越中紀行草、卯年詠草）
○また人々に請はれて万葉集を講説した。
文化　五年　一八〇八　戊辰32○四月二日出立、＜中略＞江戸に赴き加藤千蔭を訪ひ歌を唱和す。（九月千蔭歿す）＜中略＞此の行江戸佐々木三歳萬彦方にて、はじめて其の祖父元飛驒郡代長谷川庄五郎忠崇の遺著飛州志十二冊を見たれど、熟覧を許されざるに依り、塙検校より借りて、書肆須原屋佐助に嘱して

四巻迄写さしむ。七年七月更にその続きの謄写を依頼す。（飛州志後書須原屋宛大秀書簡）

文化　七年　一八一〇　庚午34◇正月二十日　大秀所持源常言書写本　正月廿日再読合畢（同書奥書）

☆春『竹取物語抄』〈物語部・33〉購入／「庚午春花箋堂」

○所蔵の住吉物語古写本を印本を以て校訂し江戸の書肆須原屋に出版をすゝむ。（須原屋宛大秀書簡）

○足立稲直入門〈篳篥入門〉（門人録）

文化　八年　一八一一　辛未35☆七月～富山の佐脇大彦来訪、大彦に大秀の加注の『竹取物語抄』を見せる。大彦、加注の『竹取物語抄』の継続完成を促す。（『解』25序・書き込こみ）

◇十一月廿九日　大秀考（『大秀補註』上三一表貼り紙）

文化　九年　一八一二　壬申36□◇一月、小山儀の竹取物語抄に註し終る。〈『大秀補註』〉（『解』序・書き込み）

☆貼紙「文化九年壬申正月十一日」（『解』25貼紙）

◇三月、「竹取物語解」初稿はじめる。

△□四月二七日、加賀、越中に遊び富山にて江戸人巨勢健冬（槇麿）にあふ。

△六月三日、加賀富田源内宅で古今講義。

☆七月六日、惟昔考重義同意文化九月申七月六日巳刻（『大秀補註』上十八裏貼紙）

△□七月二八日、槇麿高山へ来たり大秀を訪ふ。（槇葉集跋）

△八月、槇麿と共に竹取物語の本文を校訂す。（竹取物語校訂本、槇葉集跋）四日―十三日

☆八月四日、健冬と『大秀補註』に抄の本文校訂作業開始、同月十三日に終了。「文化九年壬

申八月四日ヨリ始メテ江戸人槇麻呂巨勢朝臣維昔ト右三本ヲ校合シ脱文脱字ヲ考解ノ諸説ヲ上ケテ十三日ニ到テ読終」（『大秀補註』）

△十一月、竹取物語解初稿上巻、十二月下巻成る。（同書）

◇十二月九日、「竹取物語解」初稿（下巻）なる。「竹採翁譚難解品三十三ヶ条」「竹採翁譚人名部類」を著す。

春、足立稲直入門〈始国学歌〉（門人録）

○江戸巨勢健冬入門す。（同書）

文化　十年　一八一三　癸酉37○◇四月、「竹取物語」解初校を紀伊なる大平におくりて校閲を乞ふ。（同書）

△五月四日、弘忠齊重義高山に来る。八月二十八日まで留りて名古屋に去る。（酉年詠草）

◇六月、江戸の巨勢健冬に版下書を企てるも中止する。（竹取物語校訂本）

□九月十三日、古川に赴く。十八日から古今集、古事記、竹取物語を講述。二十四日帰る。

□十一月二日、大平より竹取物語解に加筆返送。

文化十一年　一八一四　甲戌38☆三月三日、巨勢健冬歿三二歳（「詠草」和部66）／健冬歿により「竹取物語校訂本」の版下の書を健冬にすることを中止する。（『竹取物語校訂』）

△□三月盡、竹取物語追考を作り大平・鈴木朖の添削を請ふ。（竹取物語解」追考）

□九月、槇麿の歌文集「槇葉集」の跋を書く。

文化十二年　一八一五　乙亥39☆夏より竹取物語解の板行のため清書（『解』25序書き込み）

□◇七月、再度竹取物語解の校閲を鈴木朖に依頼。

文化十三年　一八一六　丙子40○□七月十四日、尾州名古屋藩士吉田専七郎千足入門寄宿、翌年十二月十五日退去す。（名簿、門人録）

△十一月九日「竹取物語解」中書、書初む（同書表紙裏）物語29

文化十四年　一八一七　丁丑41○十二月十五日、吉田専七郎千足入門前年から寄宿、退去す。（名簿、門人録）

文政　二年　一八一九　己卯43□一月二十三日、本覚禅師を同道、京、大阪に遊ぶ。竹とりの翁の物語・源道別の落窪物語注釈第一巻・曽根好忠集（奈里政輔伝本により元禄九年三好似山子長堅筆写）・伊勢国多度山所出古鏡並古器之図等を得て、三月六日に帰る。

『竹取物語校訂』奥に「文政二年二月大坂書肆葛城氏にて一写本を買得て三月十三日一校畢」

◇三月十三日、「竹取物語校訂」（文化九年の校訂本に加校したもの）を終える。

文政　四年　一八二一　辛巳45○七月十五日、門人足立稲直（「紫式部日記解」著者）歿す。年二十三。

文政　七年　一八二四　甲申48△◇十月十六日、「竹取翁物語解」草稿第一巻成る。（同書六冊2巻　四一丁裏）

文政　八年　一八二五　乙酉49☆物語24／一月七日物語24　玉の枝のくたり　解三十九張文政八年乙酉正月七日注畢大秀

☆物語24／乙酉三月朔長瀬俊香ト校了

☆物語24／乙酉年三月廿七日於荏野書畢り　解四

☆物語24／十一月一日　霜月四日解畢

文政　九年　一八二六　丙戌50○十一月二十三日、「竹取物語解」草稿（同書）／文政九年丙戌十一月廿三日解畢

☆十一月二十六日、「竹取翁物語解」草稿（物語24巻首大秀自序）／文政九年霜月廿六日

文政十一年　一八二八　戊子52☆十一月一日、本居大平序文

天保　元年　一八三〇　庚寅54☆春鈴木朖の跋文

○文政十三年春、「竹取翁物語解」六〇を名古屋松屋書店より出版す。（同書）

□三月八日、森宗祥を伴なひ出発、名古屋松屋書店で竹取解を校合、〈中略〉名古屋に帰って竹取解の製本を見届け、上京。

□春、尾張桐園蔵版松屋善兵衛製本で、竹取物語解六巻を出版。

天保　二年　一八三一　辛卯55□四月、竹取翁物語解再版。☆江戸下谷池之端「須原屋伊八」・京堀川通高辻上ル「植村藤右衛門」・大坂心齋橋北久太郎町「河内屋喜兵衛」・同　唐物町「河内屋太初」・尾州名古屋本町十丁目「松屋善兵衛」より発兌

注

（1）、新井信之『竹取物語の研究　本文編』図書出版　昭和一九・九

（2）、田中剛直『竹取物語の研究』塙書房　昭和四〇・六

（3）、『本居宣長全集』第十六巻六四三頁　筑摩書房　昭和四九・十二

（4）、『田中大秀年譜』自費出版　大正十三・十

（5）、松室会編『田中大秀』斐太中央印刷　昭和二九・六

（6）、（5）に同じ。

引用した『竹取物語』および『竹取翁物語解』本文はできうる限り本文に忠実に翻刻した。略字異体字は右に［　］をもって通行の文字を記した。

田中大秀の『竹取物語解』の調査では、高山市郷土館学芸員の皆さん、特に谷畠博之氏・小山　司氏・政井陽子氏にはお世話になりました。記してお礼申し上げます。